

明倫短期大学学会 月例研究会報告

平成25年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成25年4月25日の第61回から10月24日の第66回まで計6回が開催された11年に及ぶ66回の研究会における総演題数は125を数えた（通算回数は前進の明倫短期大学研究会からのカウント）。暦年の演題名等は学会HPを参照されたい。

第61回（通算第144回）：2013年4月25日（木）

（座長：本間和代）

アメリカ海外歯科事情 ～視察報告 in シアトル～

大手ラボにおける完全CAD/CAM化、 コンピュータによる生産管理、完全分業化

木暮ミカ（歯科技工士学科、現歯科衛生士学科）

米国でも歯科技工の世界にデジタル化、工業化の波が押し寄せてきており、産業構造が大きく変わりつつある。従来の小さなラボは、規模や資本の大きいラボによって買収もしくは吸収され、着実に減少している。

また、デジタル化は技工に携わる人に要求するスキルを大きく変えてしまっている。シアトルのラボで働いている人材は、低付加価値を担当する低コストの人材、コンピューター操作をする人材、そして高いスキルレベルが必要とされるような作業をする人材に分けられており、低コストの人材には中南米の出身者がかなり多くの割合を占めている。ポーセレンワークをはじめとする高付加価値の人材も必要とされているものの、米国全体のマーケットの傾向（大して質にこだわらない）や材料の変化に伴って、このパイも縮小している。

技工士学校を卒業した日本人が米国で技術者として活躍するには、必要とされるスキルを有すると同時に、労働者として価格競争力があることが必須条件であるが、日本人の生活レベルと感覚では低付加価値の労働分野で中南米の人と競争することは難しいと思われる。

ただし、比較的高付加価値のものができて、給与水準がそれなりであれば、活路は見出せるとも言える。

いずれにしても、歯科医療従事者は短期間でも良いので海外に出て経験を積むことで、世界的な視点で自分の置かれている状況を認識する必要があると思われる。

歯科衛生士学科入学時の基礎学力は 学習効果に影響を与えるか

山田隆文（歯科衛生士学科）

歯科衛生士学科では入学オリエンテーション時に、数学・国語力の基礎学力調査を実施している。歯科衛生士学科では国家試験の突破が最終目標であるため、3年間の学力の伸びについて、入学時の学力がどの程度影響するかの検討を行った。高校偏差値、評点は明らかな相関はなかった。しかし、入学時の数学力、特に、パーセントの計算問題の理解度が、学力の伸び、国家試験の結果にもっとも強い関係性を示した。実際には、卒業試験・国家試験に不合格であった学生は、全員がパーセント問題が解けなかった。パーセント計算は小学校の5年生で学ぶ。パーセントを理解するためには、論理的な思考能力が必要であり、小学校で理解しないまま中学校、高校を経て短期大学に入学をした。そのため、丸暗記で乗り切ってきたこれまでの試験とは違い、総合的で論理的な思考を必要とする歯科医療知識への理解力が不十分で、基礎学力が不足のまま進級してしまったことで、その後の学力が伸びなかったと考察される。今後、リメディアル教育のあり方について検討が必要である。

第62回（通算第145回）：2013年5月23日（木）

（座長：植木一範）

学習のつまずきと歯科技工教育

丸山 満（歯科技工士学科）

歯科技工実習の実習指導は重要である。実習内容の理解に至るまで複数回、もしくは個別指導が必要な学生もいる。内容を十分に理解できないまま実習を開始する学生は、学習のつまずきに発展する可能性も否めない。

そこで、以前より報告されている義務教育から高等学校までの16の学習のつまずきをもとに、歯科技工実習の実習指導との比較、検討を試みた。すると、Ⅰ：習熟練習を増やすことでクリアできる→反復実習、Ⅱ：再度、概念規定の部分からやり直す→実習説明・復習（ミニテスト等）、Ⅲ：言葉の学習をきちんとする→講義・実習説明となった。さらに、自己の進行状況を自覚するためにⅣ：目標設定→行動スケジュールの明確化も追加が必要と思われた。

学生が十分に理解できる実習指導は、反復実習、復習（ミニテスト等）、講義、行動スケジュールの明確化が肝要といえる。今後は、個別指導による放牧型、徘徊型実習とならないような指導について検討していきたいと考える。

入学時の基礎学力と国家試験の成績

大平芳則（言語聴覚学専攻）

基礎学力と国家試験（国試）の成績との相関を調べるにより、基礎学力をもとに、国試合格に向け、特定の学生に対し特別な指導が必要かどうかについての情報を得られないか検討することを目的とした。

対象は、2009年度以降、本専攻科に入学し基礎学力試験を受験した25人とした。このうち、すでに専攻科を修了して国試を受験し自己採点を行なった者は15人であった。基礎学力試験として新潟県公立高校の入試問題のうち、国語、英語、数学を実施するとともに、国試を受験した学生自身が自己採点を行ない、両者の相関を調査した。

その結果、科目ごとの平均は国語70.8、英語61.2、数学37.3で、3科目の平均は56.4であった。また、国試自己採点の平均は67.8（100点換算）であった。国試との相関係数は、国語： $r=0.43$ 、英語： $r=0.79$ 、数学： $r=0.67$ 、3科目平均： $r=0.81$ 、であった。基礎学力が高くない学生でも、国試に合格する者もある。そのような学生は、努力を積み重ね長い学習時間を確保して学習能力の不十分さを補っている。したがって、十分な基礎学力を有していない学生に対しては、入学早期より学習習慣を身につけるよう重点的に指導することにより、国試合格に導くことが可能と考える。

第63回（通算第146回）：2013年6月27日（木）

（座長：金子 潤）

キャリアスキルⅡにおける 実習指導について

佐々木聡（歯科技工士学科）

古代エジプト人の「人間」観

内田杉彦（歯科衛生士学科）

独自の来世信仰を生み出した古代エジプト人は、来世を現世の延長とみており、現世で生きるために不可欠な要素は来世でも必要と信じていた。彼らが遺体をミイラとしたのは、生前の生活に欠かせない「肉体」は来世でも必要とみていたためであろう。「肉体」の機能の中心とされていた心臓は、理性や感情、記憶のよりどころともみなされていた。しかし人間が生きるには肉体だけで十分ではなく、肉体に宿ってそれを機能させるものも必要と考えられていた。カァ（「生命力」）は人間が生きている間は「肉体」に宿り、死とともに「肉体」を離れるとされた。死者が来世に復活するためには遺体を保存し、そこにこのカァを戻すことが必要とされ、そのための葬祭儀礼が行われていたのである。やはり「肉体」に宿り、死後は日中だけ墓の外に出て自由に移動できるとされたバァ（「靈魂」）のほか、「影」や「名前」も人間の構成要素として重視された。バァと「影」はおそらく、陽光に照らされた現世の生活を死後も続けたいという願望の現れであり、「名前」はそれを持つ人間と家族や共同体とのつながりを保つ鍵であって、共同体の絆のなかで生きるのが人間であるという価値観を示すものだろう。古代エジプト人の「人間観」は、「死」と対峙した彼らが「人間として生きるとはどういうことか」という問題を追究した結果と言える。